

【聖書】

ルカによる福音書 13:22 イエスは町や村を巡って教えながら、エルサレムへ向かって進んでおられた。 23 すると、「主よ、救われる者は少ないのでしょうか」と言う人がいた。イエスは一同に言われた。 24 「狭い戸口から入るように努めなさい。言っておくが、入ろうとしても入れない人が多いのだ。 25 家の主人が立ち上がって、戸を閉めてしまってからでは、あなたがたが外に立って戸をたたき、『御主人様、開けてください』と言っても、『お前たちがどこの者か知らない』という答えが返ってくるだけである。 26 そのとき、あなたがたは、『御一緒に食べたり飲んだりしましたし、また、わたしたちの広場でお教えを受けたのです』と言いだすだろう。 27 しかし主人は、『お前たちがどこの者か知らない。不義を行う者ども、皆わたしから立ち去れ』と言うだろう。 28 あなたがたは、アブラハム、イサク、ヤコブやすべての預言者たちが神の国に入っているのに、自分は外に投げ出されることになり、そこで泣きわめいて歯ざしりする。 29 そして人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。 30 そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」

1 救われる者

私は、洗礼を受けてから暫く、「救われた者」という言葉に違和感を持っていました。その違和感は、「洗礼を受けたキリスト者だけ救われて、洗礼を受けていない人は救われないというのは、果たしてイエス・キリストのあり方なのだろうか。」という疑問から出たものでした。これは、教会の歴史の中で繰り返し問われ続けた大きなテーマだと知ったのは随分あとのことです。

「いったい神は誰を救いに選ばれ、誰を滅びに定められるのだろうか。」このことを考えるヒントが、今日の聖書テキストの中にあるように思います。「救われる者は少ないのでしょうか」(23 節)と救いについて質問する人に対して、主イエスは直接その人にお答えになることはせず、敢えてそこにいる全員に対して「狭い戸口から入るように努めなさい。」(24 節)と、救いとは直接は関係のないように思われる教えを述べた所にも、また最後に「そこでは、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」と付け加えられた所にも。いったい主イエスは、救いについてどのように考えなさいと仰っているのでしょうか、共に聖書に聴いていきたいと思います。

2 「救われる」とは？

そもそも「救われる」とは、どういうことなのでしょう。いろいろと難しい言葉で語られる事も多い「救い」ですが、実際は単純なことです。言葉通りに、命が危険にさらされている破滅から助け出されるということだと思います。勿論、ここでいう「命」は肉体の命ではありません。神の御前での命、永遠の命です。「救われる」とは、死による滅びから助け出され永遠の命を得ることだと言えます。では、私達が果たして救われるか否かは、肉体の命がなくなったあとの問題であり、肉の体をまとして生きている間は、救いとはなんの関係もないのでしょうか。

決してそうではない…と聖書は語ります。主イエスの十字架と復活により、滅びから救い出され永遠の命が与えられることは、肉体をもって今を生きている私達こそが知ることができることから。では、肉体の命をもって生きている私達が「今救われてある」というのはいったいどういう事でしょうか。

最近、インターネットでイギリスのBBC制作「ブラウン神父の事件簿」というドラマをよく見えています。イギリスのカトリック教会の神父が探偵のように難事件にいどむ推理ドラマです。日本の推理ドラマと大きく違う点は、ブラウン神父は、自身が突き止めた犯人と向き合い、必ず神の赦しを説く点です。「神さまに自分の罪の全てを打ち明けて赦して頂きましょう。神さまの赦しは大きいのです。」と語りかけます。罪を犯してしまう弱さを持つ人間に対する神の深い愛の眼差しをドラマ制作者が知っているように思えます。その中で、「私は償い切れない大きな罪を犯した。地獄に行くしかないんだ。」と絶望する犯人に対し、ブラウン神父が「地獄とは神がいない所です。神はあなたが正直に告白すれば必ず赦してくださいます。神の力を見くびってはなりません。」と語りかける場面がありました。「地獄とは、私達を赦し滅びから救い出してくださる神がいらっやらない所」。全く同感です。

だとすれば、「救われる」というのは、その逆であり、「神、我と共にあり」と言えることになります。死んでからじゃないと分からない事ではない、滅びゆく肉体をまといつつも、尚、「神、我と共にあり」と実感できる命、それが救われて生きるという事だと思います。

3 万人救済説と予定説

では、その「神、我と共にあり」という喜びをもって生きる命へと神は誰を選び、誰を選ばれないのか？誰が救われるのでしょうか。この問いかけについての一つの回答と言ってよいのが、「万人救済説」という教会の教えです。「イエス・キリストの十字架は、全ての人の罪を完全に贖うためのものであり、主イエスの十字架により、全ての人の救いは完成している。全ての人は救われている」とする説。

しかし、これに真っ向から反対する教会の教えもあります。「神さまがあらかじめ定められている人以外は、救われない」という、「予定説」と呼ばれる教えです。「神さまは果たしてあらかじめ救われる人を選んでおられるのか。それとも、全ての人を救いへと定めておられるのか」、今日は時間の都合で読むことができませんが、聖書にはどちらともとれるみ言葉があります。予定説と万人救済説、いったいどちらが正しいのか、教会の歴史の中で激しい議論が交わされてきました。「果たして神は誰を救いへと選び、誰を棄て去ったのか」－教会が向き合ってきた大きなテーマです。

4 神の先を行こうとする

しかし、このテーマを考える時、私達は最も大切なことを忘れてしまうことがあります。それは、救いの主導権を持っている者は誰か？という事です。救いの主導権は、私達人間にはありません、神にあります。誰を救いに選び、誰を破滅に棄て去るかという事は、私達の手のうちにはない、救いは神さまマター、神の案件なのです。しかし、私達はこの最も大切なことを、いとも簡単に忘れ去り、勘違いしてしまいます。

主イエスはこの私達の勘違いをはっきり糾しておられます。主イエスが初めて十字架の死を弟子達に告げた時のことでした。「イエスは、ご自分が必ずエルサレムに行って、長老、祭司長、律法学者達から多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子達に打ち明けはじめられた。すると、ペトロはイエスを脇へお連れして、いさめ始めた。『主よ、とんでもないことです。そんなことがあってはなりません。』イエスは振り返って言われた。『サタン、引き下がれ。あなたはわたしの邪魔をする者。神のことを思わず、人間のことを思っている。』」(マタイ福音書の16章21節～23節)

主は、時として激しい言葉を使われます。ここに出て来るペトロに対する「サタン、引き下がれ。」と言う言葉もそうです。この「引き下がれ」という言葉には、「私の前に出るな、私の後ろに回れ！」という意味があること、ご存じでしょうか。つまり、この時主イエスは、ペトロが無意識のうちに、主イエスの前を行き主に行く方向を指図しようとしている事を見抜き、「サタン、引き下がれ」と言われたのです。ペトロは私達です。私達も度々、主イエスの前を行こうとします、主に指図しようとしています。しかし、それでは、「神、我共にあり」とは言えないのです。「神、我と共にあり」という時の主導権は、私達ではなく、徹底的に神にあるから。救いの主導権はただ神にあるのです。

5 神の救いと棄却

では、私達は神の救いへの選びについて全く何も知ることができないのでしょうか。そうではありません。聖書から神の選びについて確実に言えることが二つあります。一つは、神が、確実に滅びへと選んだ者、神が完全に棄て去ったと私達が聖書から読み取ることができるのは、ただ一人、ご自身の独り子イエス・キリストだという事です。聖書には神から滅ぼされたという多くの人々が出て来ます。しかし、実際に神がどの人間を永遠に棄て去られたどうか、その事は、死を超えることができない私達が、正確に判断できない事です。一人の方を除いては。その方が主イエス。聖書の中には、神が完全に主イエスを滅ぼされた、完全に棄て去られたという事ははっきりと記されています。主イエスの十字架の上の「我が神、我が神、何故私をお見捨てになったのか。」叫びです。主イエス、神の御子が偽りを言うことはありません。

そして、また、次のことも聖書から確実に言えます。神はただ一人、イエス・キリストを永遠の命へとお選びになったということ。聖書には、誰か他の聖書の登場人物が永遠の命へと復活したと記した所はどこにもありません。聖書の中で神により永遠の命へと甦らされたとはっきりと記されているのは、イエス・キリスト、ただお一人だけです。だから、神学者カールバルトは言いました。「神はただイエス・キリストのみを棄て、イエス・キリストのみを選んだ。」聖書から確実に言える選びの真実だと思います。

6 狭い戸口から入ってくださるお方

このことは「神、我と共にあり。」という救いが、私達の側に根拠はないという事を如実に示しているのだと思います。私達は、神が共にいてくださるほどに何か優れた点があり、神と共にあるのにふさわしい者であるからではない。全知全能であり万物の創造者である方、時間を超えた永遠の方が共にいるのにふさわしい被造物などいないでしょう。しかし、主イエスの父なる神は、共にいるのにふさわしくない私達と共にいる事を敢えて

選びとってくださいました。その為にご自身のあり方を変えることさえいとわれなかったのです。ここに神の一方的で圧倒的な愛があります。それは今日の聖書テキストにも隠されています。

神は私達を救うために、私達と共にある為に、大きくご自身のあり方を変えられました。主は、24節で「狭い戸口から入るように努めなさい」と人々に仰いますが、先ず狭い戸口から入ってくださったのは、主イエス・キリスト。神に等しい方、永遠の方が儂い者となる、宇宙の全ての富をあわせた以上に豊かな方が、もっとも貧しくなられました、十字架の上に全てを奪われて死なれるほどに貧しくなられました。限りなく大きい方が、小さく限りある者となってくださいました。これ以上ない狭い狭い戸口から入って、被造物となってくださったのです。

このことは、神が私達人間とは決定的に異なるお方であることを私達に教えてくれます。私達は、人間を神のように祀り上げ、自分達人間を神にまで高めよう、大きくしようとする事再々です。自分達の為に、自分達の利益を計ろうと、神ならぬ者を神にしようとします。しかし、真の神は、正反対です。真の神は、自身のあり方を低く小さく変えてくださる、その動機は自分達の利益ではない、私達被造物への愛です。全く異なる者達を義とする為に、低くなり小さくなり儂くなり、狭い戸口から入り、私達と共にいてくださろうとするのです。肉体をもって生きている今、このようにして自分に愛を注ぐ神が共にいてくださる事を確信し、この神を喜び賛美し感謝することこそ、救われるという事、それが聖書で繰り返し繰り返し語られていることではないかと思います。

ですから、主イエスが救いに関する質問に対して、「狭い戸口から入るように努めなさい。」と仰られたのは、「私の後ろについてきなさい。そうすればあなたもあなた方も救われます。」と言う招きであると思います。先ほどペトロを「サタン、引き下がれ！」と叱咤したあと、弟子達に向かい「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを得る。」に通じる招きです。この主の命懸けの招きに答え続けてこそ、私達は救われます。私達は誰一人として主イエス・キリストなしで自分の力で救われることは出来ないからです。

7 選びは決断への招き

だから、「自分は救われた者だ」と私達が言い切れるような根拠、救いの資格のようなものが私達に与えられるのではないのです。神の選びというものは、何かの資格が与えられるというのではない、それを表しているのが、30節、「そこでは、神の国へと集まる所では、後の人で先になる者があり、先の人で後になる者もある。」という主の言葉です。

当時のユダヤの人々は、自分達こそ神に選ばれ救いを約束された民であり、外国人は神を知らない民であり、神の選びに漏れた者達だと考えていました。「自分達は、神に選ばれた者」という特別な資格があると思い込んだのです。そしてその資格をたてに、彼らは神の前に回り込み、神を導こうとする過ちを犯してしまいました。神の選びを特権的な資格が与えられると勘違いして、神の国への道に大きく遅れをとったのです。一方、もともと神の民の資格を与えられず遅れていた外国人達が、イエス・キリストを通

じて、神を神とする救いを知り、主イエスに従う決断の自由へと招かれました。そして神の国へ大きく近づくことができました。この事を主イエスは予告しておられます。

しかし、主は、主の周りにいてその言葉を聞いているファリサイ派や律法学者達に聞かせたかったわけではないでしょう。今を生きる私達にも、今、主イエスと共にいる救いを見失いかけているキリスト者にも、語り掛けておられるのだと思います。先ほど、私は救われるという事は「神、我と共にあり」と実感できることだと申しました。しかし、救われるというのは、神が私達の行く所について来てくださるという資格を私達が持つという事ではありません。そうではなくて、私達が神の後ろを、主イエスの後をついて行くという決断をした時に私達は救われるのです。私達が自分達の資格をたてに神に自分の救いを命令する事をあきらめ、神の命令に私達が自分を棄て従う、低い戸口から入る、その時、私達は救いを実感します。自分を遥かに超えた義なる愛のお方が自分と共にいることを確信することができるからです。そして、私達の内には、神を喜ぶ喜びで溢れます。感謝と賛美が生まれてきます。限りある自分を誇る喜び、自分に希望を置いた喜びとは、大きく異なる喜びであり、それこそ救いの喜びだと思います。別の言葉で言えば、神を神とする喜びです。神を神とする、それがまことに「神、我と共にあり」という時の私達の姿です。この喜びに通じる決断へと私達は招かれています。だから、神の救いへの選びとは、私達に与えられる命の一刻一刻に神に従うか否かを決断する自由ではないかと思います。

神が共にいて導いて下さる喜びは大きいものです。しかし私達が決断をしなければそれを知ることはできません。だからこそ主は仰います。「明日、神の選びに応えよう、招きに答えようと怠け心に生きていては、神の国の戸口が閉まってしまうかもしれない。神の招きを受けた今この時こそ、神の選びを真剣に受け止めなさい」と。主はご自身の後に従いゆく為の闘いを真剣に闘い、決断しなさいと仰っているのです。その闘いは他者との闘いではありません。何よりも私達自身の内に潜む自己中心的な思い、神を神とせずすまそうとする思いと、今この時、闘いなさい、真剣に戦って、今、神を知り、神を神として歩む救いの恵みを今受け取りなさい、と主イエスが仰っているようです。この歩みの中にこそ、神の国があるのだと思います。

8 祈りにより広がる神の国

そして、神の選び、主の招きに真剣について行こうとする時に、場所に、生まれて来るものがあります。祈りです。私達の救いは私達の手の内にはなく、自分達の力で主イエスについていくことは難しいのですから。神を神とする時、私達は祈らざるを得ないのです。神を神とする所には、必ず祈りが生まれます。「救われる者は少ないのですか」と神の救いを推し量り、「神は全ての人を救って下さる」とか「あらかじめ定めた人しか神はお救いにならない」などと、神に我々の意見や願望を押し付けるのではなく、「どうか、信仰のない私を、私の愛する者を救ってください」と真摯に祈ることこそ、私達の救いに対する正しい態度です。そこに神の力が現れる、神の国が表れます。

その祈りは、自分の事についての願いだけに留まりません。自分ではない他者の為に祈る所にこそ、神は共にいてくださいます。何よりもイエス・キリストが他者の為にあるお方だからです。私達はその証人です。その証の一つが、最近、A.Nさんが受洗の意

志を固められたという、このうえなく喜ばしい知らせでした。Nさんはお体を悪くする前は、求道者という立場で横浜ナザレン教会に長く関わってこれ、信徒であるA. N姉妹と共にご奉仕して下さったと聞いています。しかし、なかなか受洗に踏み切ることはできずに長い歳月がすぎ、そうこうするうちに妻であるA姉妹がご病気になり教会の礼拝に来ることができなくなると、夫のA. Nさんも教会から遠ざかってしまいました。そして、昨年、A. Nさんは肺炎で危篤状態になりました。が一命をとりとめることができ、三月には「洗礼を受けたい」と願い出られました。A. Nさんは、紆余曲折を経て、主の招きにこたえられました。しかし、A. Nさんは一人の力で決断したのではないと思います。その背後には、奥様のA. N姉妹、娘さんのN. N姉妹、そして妹さんであるM. T牧師という家族をはじめ、友人や教会の仲間達の祈りがありました。A. Nさんの救いを求め祈る、神の働きかけを求める願いがありました。神がこの願いを受け止めてくださり、Nさんに神に従いゆく決断へとお招きくださったのだろうと思います。

それはA. Nさんだけでなく、私達一人一人もそうだからです。私達が今、「神、我と共にあり」という救いに生き、救われた命を喜ぶことができているのは、私達自身が思いもよらない人々の真剣な祈り、神を神として救いを求め続けた祈りがあるのだと思います。私達はこれを忘れてはなりません。その祈りは、個人の祈りである共に、何よりも教会の祈りです。主イエス・キリストこそ、他者の為に真剣に祈られるかただからです。だからこそ「また、よく言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるなら、天におられる私の父はそれをかなえてくださる。二人または三人が私の名によって集まるところには、私もその中にいるのである。」(マタイ福音書18:19～20)と仰られるのです。他者の為の真剣な祈りの先頭には必ず主イエス・キリストがおられ、私達に先立ち祈ってくださいます。このキリストの祈り、教会の祈りを通じて、神が神として私達と共にいてくださる国、神の国は広がっていくのだと思います。その結果、「人々は、東から西から、また南から北から来て、神の国で宴会の席に着く。」のです。

先週、インターネットを用いた役員会を開催し、COVID-19感染が収束するまで、教会の礼拝とネットを使った祈祷会以外の全ての行事は見合わせる事を改めて確認しました。私達一人一人もなるべく外出せず家にいるように求められています。教会も教会に連なる一人一人も主イエスの教えを宣べ伝えるという務めを果たせず、教会やクリスチャンが出来る事はほとんどなにもないように見えます。

しかしそれは真実ではありません。私達は確かに従来行ってきたような伝道活動をこしばらく、行うことはできません。しかし、主イエスに従いゆくという招きに答え続ける事は、どんな時でもどこにしようともできます。私達の日常生活は、多様な決断に満ちています。その日常生活のどの決断が主イエスに従いゆく事になるのか、祈り求めていくことはできます。体は離れていても、主イエス・キリストを想い、教会の仲間の為に、父なる神に祈り求めることはできます。私達がどんな形であえ、主イエスの招きに答え続ける決断をするとき、そこに神の国が広がっていくと主は約束してくださっています。横浜ナザレン教会の一員として、今週も、主イエスの後に従いたい切に祈ります。